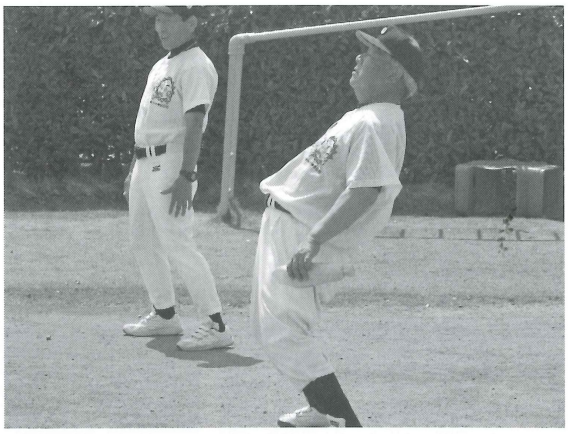
2　NPO法人『熱いぞ！熊谷からの野球教室』の取り組み

新緑のまぶしい５月18日（木）、熊谷市内の「ほしのみや保育園」で園児たちの元気な声が響く。「やったぁ、あつべえ先生だ！また来てくれたね。」「あつべえ先生！こんにちは。今日もボール投げするの。」園児が慕うあつべえ先生とはNPO法人『熱いぞ！熊谷からの野球教室』代表の長濱茂雄さん。ご自身は昭和45年、熊谷商業高校捕手として甲子園大会に出場した元高校球児でもある。その長濱さんが、NPO法人として保育園･幼稚園中心にボール投げを指導し始めたのが今から10年前。 現在では、県内のみならず東京にまでその活動拠点を広げ、年間のほぼ毎日、様々な保育園や幼稚園を訪問して子供たちにボール投げの楽しさを伝えている。

子供たちの目線で…

「はい、みんな焼き鳥を食べてごらん。その顔でニコっとすると素敵な顔になるんだよ。」あつべえ先生の魔法にかかったように園児たちの表情は輝いていく。体操は「バナナ体操」。身体を曲げる運動もバナナ体操という言葉で園児の五感を刺激し、まるでバナナになったように生徒が身体を動かす。「保育園の先生に聞くと、普通こういう運動は15分くらいしか集中が続かないそうなんです。でもね、ボール投げをやるとね、子供たちは一時間やっても、もっともっとと言ってくるんですよ。この好奇心を見逃すわけにはいきませんよ。」長濱さんの語気も強まる。準備体操も終わりいよいよボール投げに入る。

あつべえ先生登場！



バナナ体操

みんなバナナになって…

投げる動作の難しさ

あつべえ先生とともに活動を行う講師の「かじ先生」もかつて上尾高校で甲子園に出場した名選手だ。しかし、園児たちにとってはそういう肩書きではなく、やさしく一緒に教えてくれる二人の先生が大好きでたまらないのだろう。かじ先生が身振りで伝え見本を見せる。ボールが遠くまで飛ぶと子供たちから歓声が上がる。かじ先生は日本ハムファイターズの大谷選手の大きな写真も用意して子供たちの関心を引きながら投げる動作の導入を行った。投げる動作を教えるのに最初から腕や肘の使い方を言っても伝わらない。「かきくけこのくの字を作ってみよう。そして数字の１の形を身体で作ってみよう。」子供たちの目の動きや関心の度合いを測りながら臨機応変に、投げる動作へとつなげていく。

かじ先生登場！

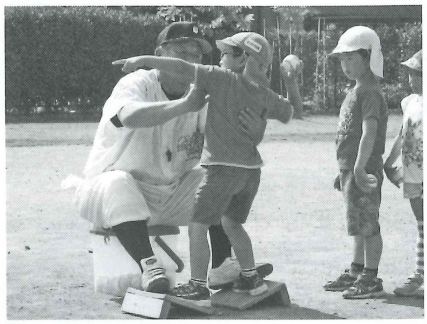
工夫と笑顔

子供達の真剣なまなざし

ほめることの大切さ

投げる動作を行っていくと、園児たちの中にも出来る子と出来ない子も出てくる。あつべえ先生、かじ先生は必ずほめることを忘れない。ほめられると園児たちは俄然やる気を出す。しかし、ほめどころを見極めるのも大切だと長濱さんは言う。「子供が何をほめられたいのか。ただやみくもにほめても子供は喜びません。できないことができたとき、その子がきらりと輝くものが見えたときにほめるんです。そうすると園児は多少きびしいことを言ってもついてきます。もしかしたら、高校野球も一緒かもしれませんよ。」活動を始めて10年継続してきた方の重く深い言葉である。

遠くへとんでけ！


手取り足取り

子供達の未来へ…

データで分析していく

一時間あまりの指導が終わった後にお話を伺うと、一枚のグラフを渡された。この活動を通して園児たちのボールを投げる力がどのように変化してきたかというデータである。訪問している保育園や幼稚園では、園によっては小学一年生の平均を超えるところも出てきたとのこと。長濱さんは言う。「子供たちのボールを投げる力が衰えているのは大人の責任だと思うんです。子供たちが思い切りボールを投げられる環境を作り、ボールの投げ方を教えてやる。時代の変化や環境の変化をいいわけにせず、大人がまず子供たちのために動くこと。」私は野球で育ててもらった恩返しをしているだけですが、この活動が少しでも広がって、子供たちが野球の楽しさに気づいてもらえたらそれが一番うれしいですね。」

いつまでも野球少年

野球が日本に定着して百年あまり。これからの未来を担う子供たちに野球の楽しさをどう伝え導いていくか。もう一度様々な観点から考え直さなければいけないだろう。取材を終え、汗びっしょりの長濱さんと椚川さんと握手を交わしたが、その手は分厚くやさしい手であった。

野球の未来へ…